

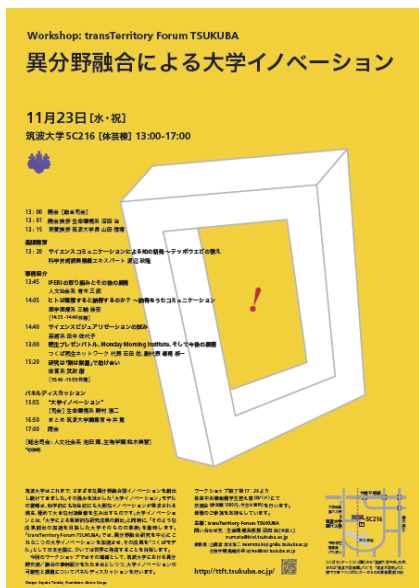
異分野融合による大学イノベーション

主催：transTerritory Forum TSUKUBA

2011年11月23日[水・祝]13:00-17:00

筑波大学5C216[体芸棟]

参加者：60名



transTerritory Forum TSUKUBA (tTFT) は、異分野融合研究を中心とした大学イノベーションを加速させることを目指し活動してきました。11月23日のワークショップでは、これまでの活動の小括として、また、今後の活動のたたき台として、①筑波大学における異分野交流・融合の事例紹介をしつつ、②それをもとに大学イノベーションをめぐる今後の可能性と課題についてパネルディスカッションを行いました。

開会挨拶：

沼田治（生命環境系、tTFT 世話人）

はじめに、沼田氏より異分野融合を基礎とした大学イノベーション推進の重要性が説明された。特に、①「テリトリーを越えるための科学」研究を通じた異分野交流・融合のノウハウ抽出、②Science Producer 育成による専門知と市民社会の架橋、③それらを推進するための人的ネットワーク構築が重要であり、こうした取り組みへの要請は東日本大震災を経てますます高まっているとの見解が示された。



山田信博（筑波大学長）

来賓挨拶：

続いて山田氏から、地球的課題解決に向けた学問分野のあり方について問題が提起された。そもそも、これまでの学問分野は過去の社会的要請に合わせて発展してきたものである。とすれば、さまざまな問題がグローバル化し、社会が変化していく中では個々の学問分野やそれに基づく研究教育も変化し、対応していかなければならない。そのためには、tTFT のような活動を加速させながら人材のモビリティを高め、分野やコミュニティを越える形で地球的課題を解決していく必要があるとの見方が表明された。



基調講演：サイエンスコミュニケーションによる知の創発—テッポウエビの教え—

渡辺政隆（科学技術振興機構）

ワークショップの開催にあたり、まずは基調講演として渡辺氏からサイエンスコミュニケーションの重要性について、テッポウエビ研究における研究者交流の事例をもとに説明がなされた。渡辺氏からは、偶然による研究者間交流を待つだけでなく、そのような交流を演出するために問題解決のためのコミュニケーションツールを備えた“trans Science Shop”を創設することが提案された。



事例紹介：IFERI の取り組みとその後の展開

青木三郎（人文社会系）

青木氏からは、人文社会科学研究科で進められている IFERI、GNP、TRANS、BCP といった諸プログラムの事例をもとに、学際化／国際化を進めるための「オペレーションシステム」を構築していくことの重要性が説明された。またその中で、実際の異分野融合は簡単なものではなく、むしろ重要なのは異分野「協働」の体制をいかにうまく作り上げることができるかという点であるとの見解が示された。



事例紹介：ヒトは理解すると納得するのか？—納得を生むコミュニケーション—

三輪佳宏（医学医療系）

三輪氏からは、異分野融合の背景となる相互理解の問題に焦点を当て、「理解すること」、「知ること」、「納得すること」の差異に着目したプレゼンテーションの重要性が提起された。その上で、プレゼンテーション能力を向上させ、「納得」にたどり着くためには、メタ情報の抽出、情報提供の順序、適切な具体例を用いた情報の質感といった要素への配慮が必要であることが説明された。



事例紹介：サイエンスビジュアライゼーションの試み

田中佐代子（芸術系）

田中氏からは、これまで芸術系を中心に、他分野の研究者と協働しながら進められてきたサイエンスビジュアライゼーションへの取り組みが紹介された。特に科学者が非専門家とのコミュニケーションを図るにあたり、適切なビジュアル化を通じた説明が非常に有効なツールとなることが強調された。また今後、「多領域と芸術の融合による創造的復興に向けた人材育成プログラムの構築」を実施するなど、将来に向けたビジョンも示された。



事例紹介：院生プレゼンバトル、Monday Morning Institute、そして今後の展開

石田尚／善甫啓一（つくば院生ネットワーク [TGN] 代表／副代表）

TGN の報告では大学院生の立場から、筑波大学の研究教育体制についての問題点が指摘され、これまでにボトムアップの取り組みとして進めてきた①「大学院生学際研究フォーラム 2011—院生プレゼンバトル—」、②「Monday Morning Institute」の試みが紹介された。また、今後の試みとして、「院生プレゼンバトル 2012」の開催、及び「教員プレゼンバトル」を計画中であることが表明された。



事例紹介：研究は「餅は餅屋」で助け合い

武政徹（体育系）

武政氏からは自身の研究過程において、異なる分野の研究者にも意見を仰ぎつつ理論的問題を解決し、デバイス作りに際して民間企業の協力を仰ぐなど、さまざまな関連専門家の助力を得て新たな知を創出してきた経緯をもとに、いわゆる「タコ壺」からの脱却を図ることの重要性が説明された。また、特に研究機関や企業等の集積するつくば研究学園都市には、このような協働を進めるにあたり「地の利」があり、それを活かすためにサイエンスコミュニケーションの深化が必要となってくるとの見解が示された。



パネルディスカッション「大学イノベーション」:

司会 野村港二

パネルディスカッションでは、討論者のみならず会場からの発言も交えつつ、多様な論点について活発な議論がなされた。中でも関心は、①異分野融合のあり方とその是非、②サイエンスコミュニケーター（SC）の位置づけの二点に集中した。①異分野交流・融合については、イノベーション創出を加速させる重要な要素であり、教員や学生、あるいは地域ぐるみの体制づくりが必要だとの見解が披露される一方で、イノベーションを生むには融合よりもむしろ協働を目指すべきであるとの見方や、異分野融合の成果と同時に失われるものにも配慮する必要があるとの問題も提起された。②サイエンスコミュニケーションについては、そのようなスキルや態度自体は重視される一方、人材としてのSCが具体的にいかなる場で活躍するのか、どのような職業に結びつくのかなどの疑問も提起された。これに対して、SC人材はまさにこれから市場を創出・拡大していく段階にあり、若手の積極的な活躍が求められるとの見解が示され、さらに関連して「SC13000人計画」が披露されるなど、今後活躍の場が大きく広がっていく可能性も指摘された。



まとめ:

今井寛（筑波大学調整官）

最後に今井寛氏から、分野間の垣根が相対的に低いという、筑波大学の出自にも由来する特徴を活かしつつ、異分野交流・融合の取り組みを進めていくことの重要性が提起された。また、今回のワークショップの成果をより具体的な形で大学イノベーションにつなげるにあたり、イノベーションの先導者としての Science Producer 育成プロジェクトや、異分野交流・融合研究プロジェクトを実施していくという見通しが披露された。

